

MMQCとは「もっと儲かる業務改善」で「業務改善は、人づくり、品質づくり」を実践する着実・前向き・具体的な活動です。

「凡事一流」と「最幸」

右掲はお掃除No.1で有名なイエローハットの鍵山氏を紹介する致知から取ったものです。解説には「黙々と掃除を続ける鍵山秀三郎さんの心掛けとは「ただひたすら、平凡なことを続ける努力をする。非凡なこともすべてそこから始まる」とあります。流石に、鍵山氏の言葉なので言霊エネルギーが高く説得力があります。私見ですが、「平凡な事」を徹底して行なうには何かしら創意工夫があり自分流(非凡)が出来ている」と考えています。「凡事徹底」から「凡事一流」が派生したのは鍵山氏の活動から出たと考えられるし、「最幸」という言葉も生まれる土壌があると考えています。



「継続は力なり」と言いますが、「凡事」(当たり前のこと)を継続するには平凡なことをやり続ける無味感の「壁」を突破する必要があります。これを突破できないので「三日坊主」という言葉があるのです。鍵山氏は「平凡なことを続ける努力をする」と書いておられます。この努力にはいろんな意味が含まれていますが、私見で書いたように創意工夫から生まれた自分流(非凡)がポイントです。この自分流の非凡が出来ると「習慣化」して「継続」が可能になるのです。まさに「継続は力なり」となって「非凡」な領域に向かって高まって行くのです。この非凡の高まりから「幸せ」という事に気づき、凡事な事にも幸せを感じるようになるのです。このレベルの方が「最幸」と表現されると言霊エネルギーは強くなります。

しかしながら、「凡事一流」や「最幸」を一般の方が使うようになりました。「そうなりたい」の思いを共有するなら言葉を使用する資格があると思います。「そうなりたい」と思い続ける事でレベルアップすると考えますが、意外

「僅かな差」を感じる「非凡」こそ「〇〇の神」と評される!

に言行不一致の方がいらっしゃいます。経営者の方に多いのは社員に「凡事」を押し付ける形が多いのです。確かに「凡事」なので自分でも出来る事なのですが、例えば、開店前の準備は「凡事」の領域ですが、お掃除は当番制なので当事者以外は何をするのが課題、これをマニュアル化して押し付けるケースがあるのです。商品棚のチェックなどは、本来、「凡事」として徹底する事なのでマニュアル化という義務性が大きなギャップなのです。つまり、創業者が「凡事」として率先垂範していた事が、世代交代で思いが希薄になり現実が乱れるのです。これをマニュアル化という手法で義務化しようとするのです。

「凡事一流」はその方の人格です。つまり、「やらされ感」の有無です。「最幸」と感謝の気持ちを素直に表す事がポイントですが、その為には「やらされ感」を乗り越えて自分流を編み出して義務感を払拭する事が分岐点です。鍵山氏の言葉にあるように「努力」がキーなのです。自分の努力で行なった事は、自分の働きとなって現れるので自分の評価として受け止める事になり、その成果に素直になれるのです。「最幸」とは、結局、他者の評価でなく自身の自己評価になるのです。素直に成果を評価できれば、「幸せ」と自己評価できるのです。

「平凡」な事をやり続けて「非凡」の域に到達するという事ですが、例えば、職人の厚さ感覚は量りの領域という事です。ほんのコンマ数ミリの違いが分かるようです。この研ぎ澄まされた感覚が「非凡」となり、名人の領域へ引き上げてくれるのです。「違いの分かる男」というコーヒーマのCMがありましたが、ブレンドの僅かな違いも分かるという領域というのは「非凡」で「凡事一流」と評価しても恥ずかしくないと思います。「僅かな違い」をパッと見抜ける研ぎ澄まされた感覚が「非凡」であり、「一流」の領域と言えます。

ワンポイント・アドバイス

「神は細部に宿る」という言葉がありますが、細部の違いが分かることが「非凡」、すなわち、積重ねで研ぎ澄まされた領域なのです。このような達人は、天性だけで生まれるのではなく、凡事として反復徹底する中で研ぎ澄まされるのです。「神」と呼ばれる神々しさを発揮する人格が形成されます。自ずから、他者から「〇〇の神様」と呼ばれるのです。

